



# 岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

出版検閲下の通俗小説研究のスタンス：  
堤千代研究の前提として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 根岸, 泰子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/44222">http://hdl.handle.net/20.500.12099/44222</a>

# 出版検閲下の通俗小説研究のスタンス

——堤千代研究の前提として——

根岸 泰子

## 1 はじめに

本稿は、戦時期の女性作家のテクストに当時の国民の心性の反映をさぐるという一連の試みの一環である。私は目下、前稿「アジア・太平洋戦争下の大衆小説―堤千代「日本の女の魂」(昭17・6)をめぐって」(『岐阜大学国語国文学』第37号、平23・3)に引き続き、堤千代の通俗小説テクストを対象とする検証作業を継続しているが、本稿では、大衆小説中の通俗小説というジャンルが、戦時検閲下の全体主義的なイデオロギーにどのように対応したかを考える際に、避けて通ることのできない諸問題を改めて整理しておきたいと思う。

一点目は、ひとりの作家のうちに、明らかに戦時下の全体主義を批判する作品と、きわめて同調的な作品とが併存している場合、それをどう解釈するかという問題である。これは戦時期の女性作家のなかにしばしば見られる現象だが、場合によってはひとつの

テクストのなかに矛盾するこの二つの指向性が同居していることすらある。拙稿「宇野千代「妻の手紙」論―戦時期女性文学テクストの「戦争協力」をめぐって」(『昭和文学研究』第59集、平21・9)および「昭和十七年に、応召はどう描かれたか―河内仙介「世紀の朝」と壺井栄「垢」をめぐって」(『岐阜大学国語国文学』第36号、平22・2)はこの問題を取りあげたものである。

しかしながら、作業の過程で次第に見えてきたのは、これは個々の作家ごとに検証されるべき問題であるが、彼女たちの個性をこえたところの、純文学／大衆小説というジャンルの問題もここに深く関与しているということであった。その意味での二点目の課題は、大衆小説の理念およびそこでの作家の役割・機能を、純文学とは別種概念として対象化する作業ということになる。以下、本稿ではこの錯綜した課題を、各節ごとに異なった角度から、考えて行きたい。

## 2 戦時下の堤テキストにおけるフェミニニティの機能

堤千代は、昭和一四年に二八歳で出世作『小指』（『オール読物』昭14・11）によってデビューし、翌年に直木賞（下半期）を受賞、主として大衆娯楽雑誌や婦人雑誌を中心に活躍した人気作家である。以下、論を始めるにあたって、デビュー直後にそのテキストを取り巻いていた状況を確認しておこう。

和田芳恵『ひとつの文壇史』（新潮社、昭42）はそれを以下のようにとまとめている。

当時、和田が編集していた新潮社の大衆娯楽雑誌『日の出』は、講談社の『キング』の対抗雑誌だった。『キング』との差別化を図る新潮社は、昭和一四年頃、佐藤義亮が女性の書き手の育成という方針を打ち出す。和田はそれを承けて、豊田正子に学資援助を申し出たり、花柳界からと思われる投稿者の居場所を苦労して探したりしていたさなかに、『オール読物』に掲載された堤千代の『小指』（昭14・12）に出会ったという。

『小指』は、一言で言えば、若い売れっ子の東京の芸妓と傷痍軍人（両腕切断）の若い少尉との恋物語である。以下、堤千代に關する和田の回想部分を引用する。<sup>32</sup>

どうして、こんなばかげた苦勞をしたかと言えば、戦時気

分が強まってきて、雑誌がかさかさしたものになり、つやっぱさが失われたからであった。堤千代の『小指』は、この渴をいやす内容でありながら、戦時体制に抵触しない小説であった。

私は、そのころ、作家に会いさえすれば、堤千代の『小指』をあげ、だれに頼まれたのでもなかったが、勝手に堤千代を直木賞にする運動員の役を買って出たらしい。陸軍情報部の鈴木庫三少佐が、ばかげた暴庄ぶりを發揮して、大衆雑誌が手も足も出なくなった頃だから、堤千代の『小指』あたりの線を、私は死守しようと思っていた。

私は、堤千代の『小指』に賭けていた。「青春叢書」のような問題が起きてくると、どんなものを書くかの参考までに、堤さんにその頃の情報を伝えたい気もした。<sup>33</sup>

堤さんが、発作を起こすかも知れないとおそれて、私の催促の役を、出版部の長沼達雄さんにゆずった。短編集の『小指』は、十万余近く出たと思う。そのあと、二、三冊は新潮社から刊行された。

長沼さんが「日の出」のために短編小説を堤さんからあずかってきたが、原稿用紙は絹の色糸でとじてあった。少女趣味が感じられるピンクの絹糸が、私の目を驚かしたものであった。原稿を読むと、書き出しを一時下げて書く約束も知らず、また、誤字も多かった。それに、少し手を入れなければならぬ箇所はあったが、内容は、堤さんの命を移したように、読む人を引き入れる力があつた。堤千代の小説は、軍部の弾圧下に咲いた大輪のボタンのようにあでやかであつた。(傍線 根岸)

戦後の記述であり、鈴木庫三の位置づけ等、出版検閲のありようが過度に図式化されている可能性はあるが、ここでいう「戦時体制に抵触しない小説」とは、文脈からみて、戦時体制下のイデオロギーに従順な小説という意味ではもちろんありえない。かといって、テキストが出版警察報で言う「風俗禁止」ほど過激ではなく、ぎりぎりで「風俗削除」未満のレベルにおさまっているというような単純な意味でもあるまい。

問題はなぜ「つやっぱさ」があるのに「小指」はぎりぎりで戦時体制に抵触しないのか、という点だ。いいかえれば、戦時体制のなかでも何らかの事情で許容されていた「つやっぱさ」とはど

のようなものなのかということである。和田はこれには答えないが、「小指」を出版検閲に抗する最終ラインとして死守する姿勢だけは鮮やかである。

議論を進めよう。「つやっぱさ」や大輪のボタンのような「あでやか」さが、堤のテキストにおけるフェミニニティ(女性性)を指していること自体には疑問の余地はない。しかし私見では、堤テキストにおけるそれらのフェミニニティおよびジェンダーは、商品としての通俗小説に期待されるような、性的存在としての女性性にとどまてはいない。

正確には、堤テキストのフェミニニティとは、第一にほとんどのテキストで焦点人物もしくは語り手が女性であること(登場人物が男性のみの作品は皆無である)、また出世作「小指」以降の作品がしばしば花柳界およびその周辺の美女(芸妓であればほぼ例外なく一級的美妓である)を主人公としていること、そしてテキストのモチーフが恋、愛および家族に付随するものが圧倒的に多いことによって生み出されている。

つまり堤テキストの世界とは、ほとんどが近代家族もしくは欠損した近代家族の物語であり、そこに規定されてある女性の物語なのだ。そして通俗小説の要請に従って、多くの場合、主人公の女性は未婚既婚を問わずやさしく善良な美女であり、そのやさし

さや善良さもまたジェンダー的特徴である。ただしこれは堤テクストではさらに別の意味を担っているため、これについては別第3節で詳述したい。

抵抗テクストという観点から重要なのは、堤テクストの女性たちのうち中産階級に属する幾人かの女性たちは、言論統制下の状況で、驚くほどに個人主義的・合理主義的な言動をおこなうもしくは彼女たちの言動はテクストによってそのように意味づけられ、しかもテクストはそれらを是認する、という点である。また別のテクストでは庶民層の女性たちが、戦時下の時局にささやかな疑問を持ちながらも、逆らいたい運命としてその疑問を押し殺し、堪え忍んでいる状況<sup>1</sup>によって全体主義のなかに陶醉してばかりではないこと<sup>2</sup>がテクストによってあからさまに示されてしまう。

これらはイデオロギー的にみても時局に対する本質的な批判性を有しており、したがって理論的には自由主義的、あるいは厭戦気分の助長として、十分に出版検閲の対象となり得た。しかしながら現実には、それらの堤テクストは、一部の派生的な例外を除いて、<sup>3</sup>検閲をすりぬけていったのである。

これが可能だった理由としては、フェミニニティがテクストのらむ時局への批判性をカムフラージュする方向に機能している

(大塚楠緒子「お百度詣」の戦略) という構造的な特徴をあげることができよう。たとえば前稿で取り上げた「日本の女の魂」では、テクストが発する反ショールビニズム(排外主義)のメッセージが、恋人の父母に自己の愛国心を信じてもらいたいというアメリカ育ちのヒロインの切ない女心を媒介させることで、巧みに正当化されていたことなどが、その一例である。

和田のいう「つやっぱさ」と「あでやか」さは、単なるフェミニニティの形象化のみならず、時局への抵抗戦略をも包含したものだ<sup>4</sup>と捉える方が、戦時下の堤テクストの実際に即している。

### 3 大衆小説における「人道主義」

#### ― 娯楽性と時代への批評性 ―

前節では、堤テクストの時局への抵抗性・批判性について触れてきた。しかしながらこの小論の冒頭に述べたように、他の女性作家と同様、堤千代にはあきらかにそれと背馳するような、全体主義的なイデオロギーに同調する数編のテキストがある。文学の戦時体制下での抵抗の問題を考える際に、これは実にやっかいな隘路<sup>5</sup>のだが、この問題については、そもそもテクストのメッセージの政治性もしくはイデオロギー性が通俗小説作家堤千代に明確に意識されていたのか、あるいはそれは大衆小説というジャンル

自体に内包されていたものなのかという問いのたて方がある。ここでは後者の立場から論を進めていきたい。

戦時中の『日の出』、『オール読物』、『キング』、『主婦之友』、『婦人倶楽部』等のメディアに掲載された彼女の通俗小説（本稿では、それら大衆雑誌・娯楽雑誌・婦人雑誌に掲載された短編小説の形式およびジャンルをさして「通俗小説」と呼ぶ）の特徴は、おおむね次の三点に整理される。

- ① 一話完結の読み切り短編（原稿用紙、四〇枚程度）である。<sup>92</sup>
- ② 語り手ないし作中人物として、堤千代本人を連想させる小説家は登場しない。<sup>93</sup>
- ③ ほぼ例外なくコント（Conte）であり、起承転結がはっきりしている。

これらの特徴のうち特に③は、堤テキストが、読者大衆にとって平易で明確なメッセージ性をもつことを可能にしている。いうまでもなくこれは商品としての通俗小説の要件でもあるが、堤テキストは前述の三条件をきわめて厳格に遵守しながら平易で明確なメッセージ性をつくりあげている。つまり堤テキストの独自性とは、このような制限下—そこには心境小説的な逃げ道は封じら

れている—で、わずか原稿用紙四〇枚の天地のうちに、古今東西のさまざまな話型を組み合わせたパリエーションを生み出すことであった。まさに、彼女は言葉の正確な意味での天才的な職人である。<sup>94</sup> 換言すれば、彼女は、自己の自意識や個性に応じたオリジナルなメッセージを編み上げる<sup>95</sup>ことには固執せず、メッセージ自体はできあいの大衆小説のそれで十分なタイプの作家であったといえる。

それでは、問題を大衆小説そのものの問題として考えてみることにしよう。これらのメディアに掲載された大衆小説が、読者に対して発するメッセージ、あるいは娯楽性の本質とは何だろうか。

鶴見俊輔はそれを、「大衆小説哲学の正道であるべき人道主義<sup>96</sup>」と簡潔に定義し、その一典型としてエノケン映画と、長谷川伸をあげる。そして後者について鶴見は、「こどものときに見た『沓掛次郎』、『一本刀土俵入』、『直八こども旅』などのやくざ映画は、私の中に入って、住みついた。ここにある理想を、私は、うけつぐべきものと思った。それは、おなじ時代に既にあらわれてきた国家主義の思想とは少し違うもので、日本が中国にしかけている戦争が正義の戦争だという考え方にはつながらない、ちがうものだというふうには感じられた」と述べている。鶴見のこの述懐は、戦時期の全体主義や国家主義の体制に対して、大

衆小説やそれをベースとした娯楽映画や演劇がもちえた批判的機能、あるいはその可能性をよく指摘している。

鶴見の感受したエノケン喜劇の本質とは、「貧相な若い男が、気もきかず才もなくいつも人々に馬鹿にされながらも、みんなの人に親切なその優しい人柄によって、まわりの人々の愛情を得るに至る」、「誠実は、不器用であっても必ず勝つ」、「昔と同じ善良な人柄」であり、長谷川伸の本質は、「暎の母」、「一本刀土俵入」、「杏掛時次郎」と『日本捕虜史』、『相良総三とその同志』を貫くところの、弱者の受難を平然と見過ごしにすることを卑怯と感じる感受性であり、また愛するものの幸福を陰ながら見守る思いやり、そして一宿一飯の恩義を守る誠意といったことばでまとめることができるだろう。

もちろん日本の大衆小説や娯楽映画の理想もしくは美学は、体制への反抗と叛逆の悲壮美——これらは主に浪人や下級武士、博徒などによって担われた——という一方の極から、庶民のナンセンスと非暴力という正反対の極までの幅広い振幅をもっている。そして何より注意しなければならないのは、前者がしばしば国家主義的な美学との親和性を示したこと——つまり当時の全体主義体制に対する抵抗の拠点としては脆弱だった点だろう。したがって、テクストを考察する際に必須なのは、個々の大衆小説テクストがそ

の振幅のどこに位置しているかの把握であろう。

堤テクストの場合も、その大衆小説としての人道主義の中核は「みんなの人に親切なその優しい人柄」、「善良な人柄」であるといっている。しかし基本的に、その世界は第2節で指摘したように近代家族という価値観に強固に立脚している。そのため物語は多くその充足の確認、欠損に対する補完、もしくは補完されたいというかなわぬ願望として展開され、恋愛もそのバリエーションとして位置づけられる。そのためにテクストは、ナンセンスよりはより真摯さseriousnessを基調とし、ドライであるよりはウェットな情動性をより多く抱え込むことになる。

他方、堤テクストは、近代家族の中で疎外される「継母」、「継子」という関係性のなかに、しばしば深い愛情を設定する。これは「性格の善良さ」は、中流階級的な近代家族あるいはその日本型としての明治民法の家制度の理念およびその限界を超える、というメッセージを含んでおり、読者に驚きと深い癒しの感覚を与える。奥様と女中、戦死者の寡婦同士に生まれるシスターフッドという設定もしばしば見られ、これも同様の効果をもつ。欠損家庭のメンバー同士が互いに疑似家族としてつながろうとするモチーフもまた、このカテゴリーに入るだろう。構造的には、これらのモチーフが

ひとつの作品に複合したかたちで現れることも、堤テクストの特徴といえる。いうまでもなくこれらの特徴は、先述した、ナンセンスよりも真摯さ、ドライであるよりはウェットな情動性という傾向を加速させる。

遺憾ながら、国民全体を階級を超えた家族とみなすような戦時下の全体主義美学に対しては、これらの傾向性はほとんど無抵抗である―むしろ進んでその熱狂的陶醉に同調しかねない―といわざるをえない。<sup>92</sup>しかし反面、堤テクストは、前述のように社会から何らかの理由で孤立した他者の悲哀に対する同調性も強く、その点で全体主義を超える可能性をはらんでいるといえ、その意味できわめて両義的なものである。

堤テクストのもう一つの注目すべき特徴は、社会における階層性が明確に意識されていることである。

テキストにおける階層は、おおむね庶民階層、中流階層（これはさらに、上層中流から下層中流までのおおの明確に書き分けられている）に分かたれ、物語は、それぞれの階層の中で閉じて自足した物語のパターンと二つの階級の交錯という第三のパターンの計三種類に分類される。

第三のパターンは、主として中流階層と労働者階層（庶民層）の対立と融和という構図を取る。これは物語の中ではおおむね上

層中流階層の労働者階層への階級的偏見という方向性であらわれるが、なんらかの契機によって上層中流階層の人間が自らの偏見を悔い改め、許しを乞うことによって、労働者階層と和解するという型である。自省の契機は、男性メンバーの軍隊経験であることが多く、彼らは軍隊における階層的な混じり合いを通した戦友との結びつきによって、階級的な偏見を乗り越える。それに対し、女性メンバーは男性メンバー（多くは息子）の結婚問題によってその問題に直面するものの、彼女自身は階級対立を超える契機を持たぬため、和解のためには他の契機（シスターフッドや男性メンバーの戦死など）を必要とする場合が多い。

通俗小説、とくに読み切りの短編形式においては、中流階層が庶民に対する単なる敵役として出てくるものは枚挙にいとまがない。その逆―中流階層に対する敵役としての庶民―もまた同様である。しかし中流階層の人間が庶民に対峙することで、このように葛藤や悔悟、認識の改変といった内面をもつ主体として表象されるという物語構成はかなり珍しい。このような設定は、堤テクストが、中流階級をひとつの階級として立体的に把握していることを示している。堤テクストにおける中流女性のリベラリズムとそれに立脚した合理主義的・個人主義的な言動は、堤テクストのこのような特性によって可能になったと考えることができるだ



る<sup>98</sup>。もちろんここで、堤千代自身が大蔵官僚令嬢であったという出自を思い起こすことも可能だろう。

先にもふれたように、労働者階層との融和というモチーフは、労働者たちが国家主義的なイデオロギーにフアナティックに共鳴している場合には、中流階層的なイデオロギーとしての自由主義・合理主義・個人主義を自ら蹂躪することになる。たとえば「今日よりは」(『オール読物 芥川直木賞六人集』昭17・2)では、下級官僚だった夫の、息子に高文をとらせたいという遺言をかなえるべく、母親が必死で育てて一高から東大法学部に進ませた一人息子が、突然大学を中退しての現役志願を母に願ひ出る。せめて大学を卒業してからという母の反対に対し、彼女の若い妹(語り手)夫妻も彼女を時局を理解せずに古い学歴主義に凝り固まった「老いた頑迷な」存在と憫笑し老母は孤立するが、女中が自発的に金齒を供出した(「今、金は御国に入用だと分つてゐますのに、やつぱり、一欠片でも自分の口の中に仕舞つて置いたのぢや相済みませんから」と願ひ出た時に、母親は号泣して自己の「個人主義」を恥じるといふ結末である。

このテキストは、堤テキストの中でもっとも国策小説的な色彩が濃厚なものだ。テキストがこのように国策同調的な結果に終わった理由としては、中産階級的な理念としての自由主義や個人

主義の本質的把握は必ずしも必要とされず、むしろそれらが人格化された「人柄」がキャラクターとして求められるという、通俗小説の特性がここに作用しているだろう。すなわち堤千代が得意とした短編読みきりのコント形式の場合に、それは顕著であり、結果的に階級的和解という図式が安易に適用されてしまったケースとみなすことができる<sup>99</sup>。

以上、堤千代のテキストを対象として、戦時下の女性による抵抗文学を論じる際の問題点について、整理・考察を行ってきた。本稿では意識的にテキスト分析を省略し、抵抗文学論のスタンスに関するメタ考察を行うという意図があったわけだが、次回はここでの結論を援用しながら、「小指」における「つやっぱさ」の具体相をテキストのなかに探ってみたいと思う。またその際には、堤テキストの読者としての軍人たちが、テキストをどのように受容したか、またそれらは堤のテキストにどのようにフィードバックされていったかという角度から、通俗小説とその読者に反映した戦時下の国民の心性の問題を考察する予定である。

【注】

- (1) 本稿では日本の全体主義イデオロギーを、国民精神総動員運動や「死報国」、「滅私奉公」といったスローガンに表象されるような、反個人主義、反リベラリズムおよびそれらと一体の反合理主義としてとらえている。
- (2) 引用は講談社文芸文庫版に拠る。
- (3) 新潮社企画の『青春叢書』のネーミングに、鈴木少佐から時局下に不謹慎とのニュアンスのクレームにつき、刊行中止になったという挿話を指す。
- (4) 堤千代は重度の先天性肺動脈弁障害で、また和田は彼女から嫌われていたという。
- (5) 大屋絹子「オフエリアの薔薇 堤千代回想記」自費出版 平3)によれば、第二作目以降は、当時女学生だった実妹の絹子氏が原稿を清書したという。
- (6) 同書、p94, 96, 98
- (7) 佐藤卓己『言論統制』(中公新書、平16) 参照。
- (8) 「黒髪的心」(『オール読物』昭15・11) は劇化された折に、時局に合わないとして一部台本の書き直しを命じられている。井上理恵「メディアのなかの女たち」(渡邊澄子共編『女たちの戦争責任』東京堂出版、平16)のp108参照。
- (9) 連載小説「我が家の風」(『東京日々新聞』昭17・12〜18・4)、「文鳥」(『主婦之友』昭18・1〜19・2)、「あと山さき山」(『主婦之友』昭19・3〜20・3)の三編も、基本的には短編に見られるモチーフの複合ないしは引き延ばしであって、短編との質的な差異は見出せない。
- (10) 堤本人を正面に押し出したエッセーもしくは身辺雑記的な作品(『私小説の作品』もない。例外的な「全機廻りなば」(『日の出』、昭19・11)の語り手の女性作家も、女性作家のキャラクターを付与された作中人物とみなすことができる。
- (11) 前掲「アジア・太平洋戦争下の大衆小説―堤千代「日本の女の魂」(昭17・6)をめぐって」の注5参照。
- (12) 図式的には、こちらは純文学作家の特徴である。
- (13) 「長谷川伸について」(『大衆文学論』、六興出版、昭60) pp188-185 (14) 注13参照。
- (15) 「大衆小説に関する思い出」(『女性改造』昭24・12)、「大衆文学論」所収、昭60、六興出版) p24。なお、彼がエノケン映画を繰り返し見てこのような感想を再確認したのは、一九四三年に海軍軍属としてインドネアのジャワ島に赴任した折である。ここでいう「昔」とは日中戦争勃発以前の彼の子ども時代の日本を指しており、それに対し一九四三年は彼にとってはどうも同調できないような、「町には殺気が満ちており」、「価値のサカゲチ」した空間だったという。
- (16) 伊藤大輔「伊丹万作と仲間たち」(『日本経済新聞』平24・2・19)が、その間の事情について簡潔に解説しており、参考になった。
- (17) その点は宇野千代「妻の手紙」も同様である。
- (18) ただしこのような言動が成立するのは、物語が中流階級の中に閉じている場合に限定される。
- (19) 商品としての通俗小説の量産を要求される作家が陥る、マンネリズムという言い方もできるだろう。

※本論考は、平成二二～二四年度科学研究費補助金（萌芽研究）による研究「戦時検閲下で、国民の心性はどう表象されたか―昭和期女性文学の対抗戦略―」の研究成果の一環である。